

## 災害仮設住宅、被災者の生活を支える地場工務店！

8/4,5 地材地建グループで熊本県の災害仮設住宅を見学に行きました。被災地は大分片付いたとはいえブルーシートのかかった家があちこちにありました。

仮設住宅というと一定期間過ぎたら解体撤去するものだと思っていたが、熊本県では後々まで公共住宅として、使えるようにコンクリート基礎で作り、長い期間でも、生活しやすい住宅となっていた。発注は建設棟数と仕様のみ決め、完成時に「物品購入」として、建設実費を纏め、請求、完成後1~2ヵ月で、現金支払い。中間支払いも認めるとの事だった。

西原村小森の仮設住宅は熊本県優良住宅協会(県内の大手住宅メーカー22社程)が手がけた団地で、木造仮設住宅30戸と集会施設(みんなの家)1棟(40㎡)が建てられていた。また同敷地内にはプレハブ住宅20戸も建設されていました。同協会は県内全体で50戸程を施工した。

木造仮設の屋根はカラー鋼板、外壁は防火サイディング T14、断熱材は壁と天井はグラスウール 10K 厚100、床はポリスチレンフォーム3種、厚50を使用していた。プレハブ住宅は同じような配置にも拘らず、軒の出が大きい為か、住宅の並びが狭く感じられた。又、外壁も鉄板の為、反射熱で前後の家も暑くなっているようだ。住民の希望は圧倒的に木造が多いらしい。外観の雰囲気からも感じられたがプレハブはクレームが多らしく、外構工事は木造で行っていた。

御船町の仮設住宅はJBN傘下の熊本工務店ネットワーク(県内の中小工務店20社程)が施工している55戸の木造仮設団地でした。年間10棟前後しか施工していない工務店が、ネットワーク全体で500戸施工するという。会長の強いリーダーシップで資材手配、大工手配、現場監督手配等を行い。CPMによる工程管理をしていた。住宅仕様はセルロースファイバーを屋根と壁に充填して断熱、基礎断熱はミフォーム保温板 T50、窓はLow-Eガラス、壁材は熊本県産杉板(本実加工)を使う等、H20年省エネ基準に適合した住宅で、仮設住宅という感覚は全くなかった。建設中の室内は涼しく、一般住宅より過し易いのではと思われた。

JBNを通じ、全国から集められた現場監督は100万円/月、大工手間は26,000円/日、宿泊・朝夕食事付だそう。従って仮設住宅も66万円/坪程度(含・外構)と仮設住宅のイメージが180度変わりました。

鹿児島県でも、建設用地の確保や、物品購入、建設協力団体等、今から打合せを重ねる必要を強く感じました。

### 【情報】

熊本地震応急危険度判定「危険」は阪神大震災を上回る  
(一社)耐震研究会・保坂代表理事と地球物理学者・島村英紀氏が「建築知識6月号」に「熊本地震の被害状況」について執筆されました。また、両氏による「検証報告会」が9/1・午後、東京・中野サンプラザで行われます。

### 【定休日】

9月は3,4,10,11,17,18,24,25日となります

10月は1,2,9,15,16,23,29,30日となります

宜しくお願いします。



西原村 プレハブ住宅



御船町 木造仮設住宅